

日本バラッド協会第13回（2022年）会合 2022年3月26日

講演 三井 徹

伝承バラッド“Pretty Polly”の旋律が沖縄音階に

概要：

ジョンとアランのローマクス父子が1930年代に、重い録音機械を車に積み込んで全米各地を回り、多様な民謡を録音収集しました。その成果として、1941年に刊行された民謡集、*Our Singing Country: Folk Songs and Ballads* は、ローマクス父子が編集した民謡集の中でも結局、最も価値あるものとなっています。

白人と黒人の民謡から成るその200強の曲集の中に、伝承バラッドも少なからず含まれており、そのなかでも1961年に私が強く魅かれたのが英国のブロードサイド・バラッドに基づく“Pretty Polly”（プリティ・ポリ）でした。

好んで歌っていたそのバラッドの旋律の主要部分が、その当時は意識していなかったのですが、なんと沖縄音階を構成していることに思い当たりました。その歌からもう三十年少々遠ざかっていた二十年程前のことです。

そのことをお話し致します。

小学校時代から付けてきた日記を拾い読みしていくと、こんな記述が出てきます：「Balladに興味を持つようになってようやく一年になった。一年と4、5日過ぎていく。大川の公民館の楽屋以来のことだ。一年の間によくいろいろ ballad に深入りしてきたものだと思う」。1961年7月22日の日記です。

そこで振り返っている一年前の1960年7月12日に、佐賀県大川市の公民館に学生バンドとして出演した際に、楽屋で友人の橋本健氏が、くつろぎがてら、“Barbara Allen”を歌ってくれました。妹さんが、通っているカトリック系の女子校、双葉高校の図書室から借りてきた英語圏の歌集に入っていたのがそのバラッドで、初めて耳にした私は、その歌詞と曲とにすっかり魅せられました。その二週間後である1960年7月26日の日記に、「夜、イギリス民謡“Barbara Allen”をギター伴奏で歌う練習をした」とあり、その一週間後の8月2日の夜には、耶馬溪（大分県）のキャンプ場で学友相手にそのバラッドを歌ったとあります。

そして、「よく…深入りしてきたものだ」とあるようように、間もなくバラッドへ

の学術的関心が高まり、日記を読み進めていくと、あれやこれやの記述が並んでいて、同じ 1960 年の、三ヶ月半後である 11 月 1 日に、「九大文学部の [英文学] 研究室へ ballad の collections を探しに出かけた」とあり、「自分でカードを探したら、Percy の Reliques 3 巻と Quiller-Couch の Oxford Book of Ballads と Gummere の Old English Ballads が見つかった。Child のは無かったけど、[非常に] うれしかった」と記しています。Henry B. Wheatley が 1889 年に編集した *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) の第三巻に、確かに “Barbara Allen’s Cruelty” が掲載されており、その頭注で Wheatley が、18 世紀中期の作家、Oliver Goldsmith の一言を引用しているのがとても印象的でした：「どんなに素晴らしい歌手の音楽も、うちの乳絞り娘が涙ながらに “Johnny Armstrong’s Last Good Night” あるいは “Cruelty of Barbara Allen” を歌ってくれたときに感じたものに比べれば不協音に過ぎない」。日記によると、その三巻本を返しに行ったのは一ヶ月後の 12 月 2 日でした。

F. J. Child 編集のバラッド集については、三ヶ月後である 1961 年 2 月 27 日の日記に、「東京地図を頼って、本郷の東京大学へ。[総合図書館で] 時間をかけて書籍を探した。結局、二冊と Child の 8 冊の Collection とを出してもらい、広大な図書室で読む。あまり参考にならなかった」と記しています。その「8 冊」は、決定版である *The English and Scottish Popular Ballads* (1882-98) の一段階前である *English and Scottish Ballads* 全八巻 (1860) でした。決定版に直接触れたのは、八ヶ月後の 1961 年 10 月 14 日のことで、「電話して同志社 [大学図書館] へ。Child ballads にはじめてお目にかかる。5 vols. でタイプ用紙ぐらいの大きさ。すごい本だと思った。5 冊目に tunes (from MS.) が 54 程載ってるので、持ってきた 5 線紙にほとんど全部写しとる。二時間程かかった」と書いています。その二日前である 10 月 12 日の日記には、「市電で京都大学へ行く。[...] ところがたずねる人がいない。しかし事務員が気をきかして本を探してきてくれた。だが Child の「ballads」はない」と記していました。

一方、それより以前の 1961 年 3 月 29 日の日記には、こう書いています。「午後、[福岡] アメリカ文化センターへ出かける。今までどうして気が付かなかったのだろう。[この] 文化センターに図書館があるではないか。従って、folk music の reference books だってあるにちがいない。図書館は二階に移っていた。[...] 思えば、高校時代はこの階段は幾度となく昇降したものだだった。[...] ごきげん！ 沢山の folk songs の本がある。Ballads [の本] も沢山。一冊は *The Ballad Tree* という、英文学でとり上げられている、Child 本に属する old English & Scottish ballads の研究書で、tune と ballads が 60 もある」。そして、翌 3 月 30 日の日記には、「朝、fiddle を弾き、午後、ギターで ballads を、夜は、昨日文化センターで借りた *Our Singing Country* (Lomax) と *The Ballad Tree* をただあ

ちこち読んだりながめたり。もし、自分が刑務所のようなところに放りこまれ、こんな本とギターとを投げこまれたら、それこそご機嫌だろうな」とあります。

その *Our Singing Country: Folk Songs and Ballads* は、John Lomax が、18 歳の息子の Alan Lomax を伴って、1933 年から米国各地で民謡を現地採集した成果で、1941 年に刊行されました。マクミラン社と出版契約を結び、旅行の費用を慈善団体から集め、議会図書館に提供してもらった重さ 350 ポンドの録音装置を車の後部座席に組み込んだの現地採集旅行でした。

その現地採集民謡集 (全 205 曲) の中のあれこれを歌ううちに、とりわけ魅かれたのが “Pretty Polly” でした。これは、元は、18 世紀前半の英国で起きた、妊娠した恋人を殺害する事件に基づいた “The Gosport Tragedy” という題の broadside ballad で、それが “The Cruel Chip’s Carpenter” に転じたあと、米国で “Pretty Polly” になったものです。事件の具体的細部は消えてしまい、若い娘 Polly が、Willie に森に誘い出され、殺され、埋められる悲惨なバラッドとして伝承されてきました。*Our Singing Country* に載っているのは、他の曲同様、現地録音の歌の歌詞をローマックス父子が文字化し、旋律を Ruth Seeger が聴き取って五線譜化したもので、歌詞は以下のように記されています。各連は三つの行から成り、省略されている第二行は第一行の繰り返しです。

I courted pretty Polly the livelong night,
Then left her next morning before it was light.

“Pretty Polly, pretty Polly, come go along with me,
Before we get married, some pleasure to see.”

She got up behind him and away they did go,
Over the hills to the valleys below.

They went a little farther and what did they spy?
A new dug grave and a spade lying by.

“Willie, O Willie, I’m afraid of your way,
I’m afraid you will lead my poor body astray.”

“Pretty Polly, pretty Polly, you’re thinking just right,
I dug on your grave the best part of last night.”

He threw her onto the ground, and she broke into tears,
She threw her arms around him and trembled with fear.

“O Willie, please Willie, please spare my sweet life,

How [c]an you kill a girl that was to be your wife?"

"There's no time to talk now, there's no time to stand,"
He threw out his knife all in his right hand.

He stabbed her to the heart, her heart's blood it did flow,
And into the grave pretty Polly did go.

He threw a little dirt over her and started to home,
Leaving no one behind but the wild birds to mourn.

A debt to the devil poor Willie must pay,
For killing pretty Polly and running away.

この計 12 連のうち七つの連は、ローマクスが、Aunt Molly Jackson が歌った版のもので補っており、民謡収集者としての姿勢を疑問視せざるを得ませんが、当時の私はこのままに歌っていました。ただし、説教臭い最終連は余計な付け足しとしか思えず、除外していました。

この歌詞の各連に伴なって繰り返される旋律、および、歌詞の一行目と三行目に続くギター間奏の、ルース・シーガーによる記譜は下記の通りです。シーガーは、読者に歌いやすいようにとということでへ長調に転調していますが、私には、そのへ長調では音が高すぎて、いつも三音下げたハ長調で歌っていました。

Moderately fast $\text{♩} = 112$

I court-ed pret-ty Pol - ly the live - long night, *

I court - ed pret-ty Pol - ly the live - long night, Then

left her next morn - ing be - fore it was light. *

* The guitar accompaniment (continuous throughout the song) interpolates here, in each stanza:

このバラッドを、1961 年の 3 月下旬に知って以来、気に入ったほかのいくつかのバラッドとともに自宅で歌ってしまして、6 月 4 日の日記に、「午後、橋本宅へ行く。下駄ばきは気持ちがいい。[...] 橋本君としばらく歌う。少し調子がいい。今日は、

“Pretty Polly”を歌ってのち、レコードで同じ曲をきく。 […] なんともいえない泥臭さ
というか飾り気のない素朴なうなる様な感じの歌いかた」と書いています。橋本氏が
聴かせてくれたのは、1956年に出た *Smoky Mountain Ballads* と題したLPに入っている
“Pretty Polly”で、Jeanie West が夫の Harry West の五弦バンジョウ伴奏で歌っているも
のです。この“Pretty Polly”の音階は私が歌っていた長調とは違う短調であり、後で知
るようになるのですが、この曲としてはごく一般的なものでした。しかし、長調と短
調の違いはあるものの、それを意識はしないまま、その歌唱演奏に影響を受けたのは
間違いなく、五ヶ月後である1961年11月4日の日記に、「日の射す縁側で五弦ギター
をつまびく。「Pretty Polly」を覚えてしまう。14日にはこれを歌うから。 […] story に
つれて涙が出てきた。「Kevin Barry」のとき以来だと思う」と書いており、現に11月
14日に、福岡の中州にあった百貨店「玉屋」のホールで開催のコンサートに出演して
歌いました。なお、私は五弦バンジョウは持っていないで、ギターを五弦にして練習
をし、当日は橋本氏から五弦バンジョウを借りたのでした。

さて、ここで本題に入りますが、この旋律はなんだか異様に思いませんか。ルー
ス・シーガーが記譜したものをもう一度見てください。1961年の時点では、そして、
その後も長いあいだ私は意識していませんでしたが、こんな旋律がアメリカに存在す
るのは尋常ではありません。ローマクス父子がこれを録音したのは1937年で、場所は
ヴァージニア州ラグビーであり、歌っているのは E. C. Ball という名の男性です。生年は
1913年であることを知ったのは、はるか後の1997年のことでした。

旋律は三つの楽句で構成されており、その楽句はそれぞれ四小節から成っています。
便宜上、その三つの楽句を A、B、A' と称しておきます。最初の楽句 A は歌詞の各連
の第一行に相当します。そして、その第一行の歌詞が第二行で反復される際に、旋律
の方は新たな楽句 B に展開しますが、それに続く、歌詞の第三行に相当する楽句 A' は、
出だしに変化があるものの、第一行に伴なう楽句 A と同じものです。

その旋律を風変りにしているのは、その二つの楽句 (A と A') が、階名読みをしま
すと、「ド/ドードミ/ドシソシ/ドミファミ/ドー」 (A)、及び、「ソ/ソーファミ/ドシ
ソシ/ドミファミ/ドー」 (A') であることです。つまり、この旋律の主要部分の音階は
「ドミファソシ(ド)」であり、沖縄音階(琉球音階)と同じです。これは五音音階の
一種で、「ドレミファソラシ(ド)」という七音の長音階と並べると、二度と六度、つ
まりレとラを欠いた音階であることがわかります。その五音音階を強調しているのは
ギターの間奏であり、この旋律で歌われる歌詞の一行目と三行目の直後に「ファミ/ド
シソシ/ドミファミ/ド」が連ごとに繰り返されます。米国では、「ドレミファソラシ
(ド)」の長音階から二音を欠いたものは、四度と七度、つまりファとシを欠いた「ド

レミソラ(ド)」であり (広く知られた曲としては “Amazing Grace”)、私がかぎり、「ドミファソシ(ド)」という五音音階は存在しませんでした。

米国の人たちには、それほどこの音階は馴染みがないものであり、これも後になって気が付いたことですが、*Our Singing Country* に掲載されているこの旋律を使って “Pretty Polly” を歌っている音例に出くわしたことはありませんでした。1941 年に刊行されたこの本自体は広くは普及していない筈で、その六年後である 1947 年に、一般向けにローマクス父子が編纂した *Best Loved American Folk Songs: [Folk Song: U. S. A.]* と題した大判の本にこの “Pretty Polly” の旋律と歌詞が掲載されました。そして、十九年後の 1966 年にはその本が安価な小型紙装版として再刊されました。書名は *Folk Song U. S. A.: The 111 Best American Ballads* です。ということは、1947 年本がある程度普及し、1966 年本はさらに普及したことは間違いありません。ところが、この旋律と歌詞を用いた “Pretty Polly” の歌唱演奏は、おおよげに耳に出来るものは、知るかぎり、現われずじまいでした。やっと出てきたのは、なんと 1998 年のことです。

歌っているのは Kristin Hersh という 1966 年生れのシンガー・ソングライターで、ロック・バンドを二つ組んでいた人です。1998 年に出た、アパラチア山脈地帯の殺人民謡を取り上げた *Murder, Misery and Then Goodnight* という CD の五曲目で歌っています。調はハ長調で、五音音階です。しかし、その五音音階は「ドミファソシ^b(ド)」であり、一貫して「シ」が半音下がっています。ギターの間奏は「ミミファソ/ファミドミ/ミミファミド」であり、「シ」は避けられています。その後、2020 年 10 月発売の *Sam Amidon* と題した CD の二曲目で、1981 年生まれのサム・アミドンが、同様に、明らかにルース・シーガーの記譜に基づいて “Pretty Polly” を歌っていますが (調はニ長調)、同じく「シ」は半音下がっており (ドミファソシ^b[ド])、ギター間奏は同じく「シ」の音を避けています。

それほどに米国の人たちには馴染めない「ドミファソシ(ド)」という五音音階が、どうして生じることになったのでしょうか。それを探っていくと、鍵になるのは、アラン・ローマクスが、E. C. ボールが歌う “Pretty Polly” を現地採集した際のことを記した解説です (ただし、それは 1937 年に採集したときのことではなく、四年後の 1941 年に再度 “Pretty Polly” を採集したときのことです)。

流布はしていない議会図書館 78 回転盤に添付の、その曲目解説で (1942 年)、アラン・ローマクスは、この “Pretty Polly” は、Theodore Dreiser のあの「どっしりと重い」小説 *An American Tragedy* と同じ主題をわずか六連で見事に歌っていると評価したあと、「この歌い手がこの曲と伴奏を知ったのは、いまは絶盤になっている 1925 年ビクター発売の素晴らしい商業レコードだった」と記しています。そして、「そのレコードで

聴ける元のバンジョウ伴奏をこの歌手は「ボールは」自分のギターに上手に取り込んでいる」と書いています。ボール自身がローマクスに、そのレコードを聴いて覚えたのだと言ったのでしょうか。続いてローマクスは、「聴いての通り、レコードが、かつては流浪のバラッド歌手が果たしていた役割に取って代わっていることが見てとれる。今日ではラジオが同様の機能を果たしている。民謡歌唱は実に息が長い」と、レコードという新メディアが、ラジオに続いて、民謡の伝承に果たしている役割に触れています。

ローマクスはそのビクター録音の歌手兼奏者の名前は記載していませんが、調べたところ、ケンタッキー出身の B. F. Shelton であり、そのレコードは、1925 年ではなく 1927 年に発売されていたことが判明しました。そして、そのシェルトン版と直接比較すべきボールの歌唱演奏の録音が、実は存在していることも判明しました。アラン・ローマクスは、1941 年に録音する四年前の 1937 年にもボールを録音していたのです。思いもよらなかったことに、ボールが 1937 から 1975 年にかけて単独で、また妻と共に歌唱演奏した録音、全 28 曲を集めた CD がヴァージニア州ロウノークの小さなレコード会社から 1997 年に発売されていて (*E. C. Ball and Orna Through the Years 1937-1975*)、その中に米国議会図書館所蔵の 1937 年録音が含まれていたのです。序文が 1941 年 3 月に書かれた *Our Singing Country* に 1941 年録音の曲が収録されたはずはなく、議会図書館は当然 1937 年録音も所蔵していたのでした。

1941 年録音と 1937 年録音との歌唱演奏はどちらもハ長調の五音音階（ドミファソシ[ド]）であり、旋律とギター間奏にも相違点はありません。六つの連から成る歌詞も同一です。異なるのは、1941 年録音の方がテンポが比較的速く、それだけ軽やかであるほかに、冒頭にギター導入部があり、八分音符（記譜した場合）の連続から成る早弾きが披露されています。議会図書館が発売した音が、*Our Singing Country* が対象とした 1937 年録音ではなく、刊行後の 1941 年録音であるのは、その録音の方を良しとするアラン・ローマクスの美的判断に基づいていたのでしょうか。

Our Singing Country の譜面では、ルース・シーガーが「一般の人々の声域に合わせて移調」していますが（ハ長調）、1937 年録音では、それに、1941 年の録音を議会図書館が LP 化した音でも、調はハ長調で、終止音は c です。ごくわずかに c より高めであるのはギターを調弦する際の誤差と見て間違いないでしょう。採譜を担当したシーガーは、ローマクス父子が録音した音を複製した盤を 78 回転で再生したと記載していますが、その過程で、元の録音の回転を正確には再生していなかったこととなります。*Our Singing Country* 収録曲すべてに及ぶその疑問は、シーガー自身も意識しており、元の録音との違いがありうると説明しています。

紙面での比較の便のために、そのボール版とシェルトン版の録音を私の聴き取りに基づいて譜面化しておきます。まずシェルトン版をご覧になったあと、ボール版を見てください。(歌詞は、比較の便として、シェルトン版とボール版が同一である連を対象にしています。冒頭の“stobbed”は、正しくは“stabbed”と綴られるべきですが、どちらの版でも、最初の母音の発音は stop の母音と同じであることを示しています。)

B. F. Shelton

A

He stobbed her to the heart, her blood it did flow,

(1) (2) (3) (4)

(Instrumental) He

B

stobbed her to the heart, her blood it did flow, And

A'

in- to the grave pret- ty Pol- ly did go.

(1) (2) (3) (4)

(Instrumental)

E. C. Ball

A

He stobbed her to the heart, her blood it did flow, (Instrumental)

(1) (2) (3) (4)

He

B

stobbed her to the heart, her blood it did flow, And

A'

in- to the grave pret- ty Pol- ly did go. (Instrumental)

(1) (2) (3) (4)

シェルトンが歌唱演奏している五音音階は、短調から二度と六度を抜いた音階で、階名で示すと、「シ」と「ファ」を欠いた「ラドレミソ(ラ)」となります。終止音かつ主音は、1960年代半ばにLP化されたものを聴きますと、*g*と判断できます (*Old-Time Ballads from the Southern Mountains* 所収)。それは、別のLPに収録されている、同じく1927年7月29日に録音されたシェルトンによる別の曲“*Oh Molly Dear*”が裏付けています。同一音階であり同様の器楽間奏を含むその曲の主音も *g* なのです

(*Traditional Country Classics* および *The Bristol Sessions* 所収)。歌詞に沿うシェルトンの旋律は、理論上は、四拍から成る小節が計四つ集まって構成する楽句が三つ連らなつたもので、その三つの楽句は、内容からして、A+B+A' に分類できます。

特徴的なのは、演奏全体の構造に、一貫する単位として器楽間奏が組み込まれていることで、最初は、出だしの四小節楽句 (A) の最終小節が四拍を満たさずに二拍で終えられた直後に A の変奏である器楽間奏が入ります。二度目は三番目の四小節楽句 (A') の最終小節が、これまた四拍を満たさずに二拍で終えられた直後に同一の器楽間奏が入ります。ボールの歌唱演奏は、基本的にシェルトン独自のその反復構造を踏襲しています。しかし、ボールの器楽間奏の旋律は、歌唱に伴う第一楽句の変奏ではあるものの、その楽句の第一小節は後半のみを用いていて、それを歌唱の第一楽句の第四小節の後半に嵌め込んでいます。そのために、シェルトンがその第四小節を四拍ではなく二拍で終わらせることは踏襲していないものの、その後が続く間奏は四小節ではなく、三小節の構成になっています。

演奏全体のテンポを計ってみますと、シェルトン版が、二分音符が一分間に 120 強というかなりの速さであるのに対して、ボール版は 100 弱と遅くなっています。(ルース・シーガーが、二分音符を一分間に 112 奏するテンポであることを譜面に記載しているのは、録音を再生して聴きとった終止音が、実際の c ではなく、一音高い d になっていたことと一致します。)

ボール版の目立った違いは、シェルトン版の短調五音音階を長調五音音階に変えたことであり、それによって、シェルトン版の第一楽句 (A) の最初の小節で、第一音と組み合わさって短三度音程を構成する第三音は、ボールの旋律では半音上がり、長三度音程を構成します。そして、二番目の小節の、一オクターヴ下の第七音も半音上がっています。ただし、その上がり方は、録音を聴くと必ずしも明確ではありません。長調に変えたことが半音上げることを促すものの、ボールは必ずしも落ち着きを感じていません。しかし、そのまま済ませているのは、その音が強拍の来ない経過音であるからと判断できます。しかし、ギターによる器楽間奏では、その音は明確に「シ」です。ギターの指板にはフレットが刻まれており、どっちつかずとはいきません。そして、器楽間奏の、その明確な「シ」がボール自身の歌唱に影響を与えていると言えます。

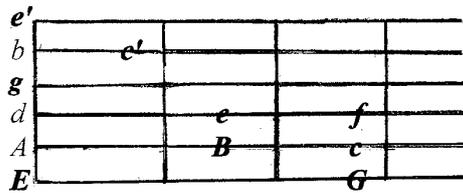
その「シ」に対して、第二楽句 (B) の第一小節と第三小節それぞれの二箇所で最高の音として出てくる「シ」は半音下げられ、明確に「シ_b」音を発しています。もし「シ」であった場合に、その一つ前の音である「ソ」と構成することになる長三度の音程を良しとしないというよりも、シェルトン版の短三度音程をそのまま心地よいものとして受け継いでいると思えます。一方、第一楽句 (A) と第三楽句 (A') で、長

調音階に変わったことによって半音あがった「ミ」が、主音の「ド」と長三度音程を作ることが問題でないのは、それが、ギター伴奏が一貫してストラムする主和音の構成音であるからに違いありません。

その第一楽句と第三楽句の間に、それとは対照を成す旋律展開の第二楽句を挟み、かつ器楽間奏を含むという、全 18 小節構成の中で、譜面に記した番号 2 から番号 4 に及ぶ三小節の楽句が、番号 1 の後半を弱起として、四回繰り返されます。歌詞を伴う場合と器楽のみの場合の両方を合わせたその四回が、各連の歌唱ごとに繰り返されていくわけで、その音の動きは譜面の読み手の頭に植えつけられます（ここでは比較分析上、聴き取り譜を示していますが、この講演原稿で最初に掲載した譜面下部のギター譜をご覧ください）。その植えつけられる旋律の音階は、米国で一般に知られている音階のどれとも異なります。執拗に反復される、弱起部分（番号 1 の後半）に始まるその三小節を構成する音階は、偶然、沖縄音階を構成する音階と同一になっています。

米国の音楽一般からして変則的であるその音階が生じた理由は、20 世紀に入ってから南部の田舎にギターが普及したことであるのは間違いないでしょう。南部の英系民俗音楽の主流楽器であるフィドルに、アフリカ起源の楽器である五弦バンジョウが加わったのが 19 世紀半ばで、その後の 19 世紀後期にギターが米国社会に浸透し、そのしばらく後に南部に入り込みました。北部の大手通信販売会社、とくにシアズ・ロウバックが、大半は弦が鋼鉄弦であるギターを 2 ドル 70 セントから 10 ドル 30 セントに至る安値で販売しはじめたのです。1929 年には米国で生産されたギターの数は 16 万本を超えていました。

そのギターの指板上で構成される固定した和音の型は、調性音楽に基づくものであり、機能和声を構成します。そして、土着音楽を演奏する奏者たちは、同じ主要三和音でも、開放弦が利用可能となる、ネックに隣接した低音部分で構成される和音の型を好みます。また、その和音は通常、長調の主要三和音です。英系民俗音楽には短調は少なく、それだけ、短調和音が用いられる頻度も高くありません。ギター奏者であるポールは、シェルトンが五弦バンジョウで演奏している旋律を、主和音のみを用いながら、長調に当て嵌めました。ポールによる “Pretty Polly” の歌唱演奏の主音は c (ド) であり、和声の変化はないまま一貫して用いられる主和音は、通常の場合（ポールが右利きであることは 1997 年発売 CD のカバー写真でわかります）、次の図が示す、左手の人差し指、中指、薬指が同時に押さえる c' と e と c 、および開放弦の e' と g と E とによって構成されます（薬指が G 、小指が c を押さえることも一般的ではあります）。



全弦、あるいは数本の弦を掻きならして主和音を奏せるこの型では、器楽間奏の反復楽句である $f e/c B G B/c e f e/c$ (ファミ/ドシソシ/ドミファミ/ド) を、隣接したフレット上で薬指と中指を交互に動かすことによって容易に弾くことができます。既に型として薬指が押さえている c を右手が撥弦するのに始まり、同じく既に型として中指が押さえている e 、薬指がすぐに移動して押さえる f 、中指が押さえている e 、薬指を戻した c 、中指が移動して押さえる B 、薬指が移動して押さえる G (以下省略) という順にしたがって右手が撥弦していきます。つまり、器楽間奏の旋律は、左手としては、隣接した低音弦三本の隣接したフレットの上を薬指と中指が行き来するだけですみます。ポールが、声域としては無理がないと思えるニ長調を用いていないのは、指板上のニ長調主和音の型では、このような隣接フレットのみ使用は不可能であり、左手指さばきが比較的面倒になるからに違いありません。

「元のバンジョウ伴奏をこの歌手は自分のギターに上手に取り込んでいる」とアラン・ローマクスが議会図書館発売盤に添えた曲目解説で記したことは、以上の分析で説明出来たはずです。ただし、ローマクスは、それが沖縄音階を生じさせていることには、とても思い当たらなかったことでしょう。

そして、結局のところ、1930年代半ばにヴァージニア州ラグビーで旋律変形した“Pretty Polly”の変形は、受け継がれることはなかったのです。

それは、この曲がおおやけになったのが紙上のことであり、1941年刊行の本に記載され、1947年刊の本と1966年刊の本に再録された譜面を通してであったためでしょう。譜面の元である歌唱演奏の音が広まることはなかったのです。

米国議会図書館が、所蔵する現地採集録音を多数の78回転盤で販売したのは1942年のことでした(その中に、1941年にローマクスが録音した“Pretty Polly”が含まれていました)。そして、33 $\frac{1}{3}$ 回転盤が開発されたのに伴って、議会図書館は78回転録音をLP盤に収録して1956年に発売しました。それを私が注文したのは1965年と1967年のことで、LP盤を計十枚取り寄せました。当の1941年録音の“Pretty Polly”(AAFS L1, Side A所収)を耳にしたのは1967年の3月であり、自分で好んでこのバラッドを歌うようになってからもう六年が経っていました。

その私の耳には、E. C. ボールのギター技巧（1920年代後期から普及してきた技巧）、それに（マイクロフォン依存による）クルーナー的ヴォーカルは、思いがけないものでした。そもそも、音は知らないまま楽譜を通してこの曲に魅かれていた上に、1961年に橋本宅で耳にしたジーニー・ウェストによる五弦バンジョウ伴奏による土臭い歌唱の“Pretty Polly”に影響を受けていたからです（のちにわかったことですが、そのウェストは明らかに、B. F. シェルトンの1927年の歌唱演奏を、少し遅いテンポで手本にしていました）。しかしながら、もし楽譜に接した間もなくあとに、1941年のボールの歌唱演奏を聴いていたとすれば、事情は異なっていたでしょう。その初期カントリー音楽（ヒルビリー音楽）ふうの音を手本にしていたかもしれないのです。

本国の米国でどれだけの数の人が議会図書館に78回転盤なりLP盤なりを注文したのかはわかりませんが、もしも、議会図書館発売の盤を通して1941年の録音がある程度普及していたとすれば、その音を手本にする人は少なからずいたことでしょう。

この講演原稿の元となる詳しい英文論考では、参考文献と参考音源を明示しております。ご希望が
おありでしたら、Eメールでその英文をお送りさせて下さい。(mitsui@angel.ocn.ne.jp)

その他のバラッド関連拙稿としては、日本バラッド協会がホームページに「研究論文・書評他」として拙稿9点の題名を掲載して下さっていますが、それ以外の30点弱の一覧をお送りする用意もしております。

一方、当講演では言及は控えていますものの、米人 Thane Mitchell 氏の五弦バンジョウを伴奏に、三井徹がギターを手にして歌唱演奏している1964年12月録音の“Pretty Polly”があります：*Reel-to-reel recordings of American and British songs, ballads and instrumentals performed by Tōru Mitsui in 1963-1966 in Japan* (Previous Records PR NONE-1, 2006) 所収。